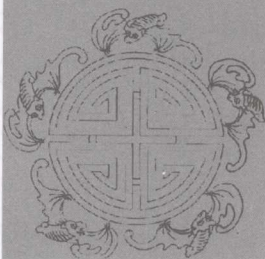


邢永凤 \ 著

前近代日本人的对外认识

中国社会科学出版社



邢永凤 \ 著

前近代日本人的对外认识

中国社会科学出版社

图书在版编目 (CIP) 数据

前近代日本人的对外认识/邢永凤著. —北京: 中国社会科学出版社, 2007. 11

ISBN 978 - 7 - 5004 - 6691 - 8

I. 前… II. 邢… III. 对外政策 - 研究 - 日本 - 近代
IV. D831.30

中国版本图书馆 CIP 数据核字 (2008) 第 000721 号

出版策划 任 明
责任编辑 王 茵
责任校对 李 然
封面设计 典雅设计
技术编辑 李 建

出版发行 **中国社会科学出版社**

社 址 北京鼓楼西大街甲 158 号 邮 编 100720

电 话 010 - 84029450 (邮购)

网 址 [http: //www. csspw. cn](http://www.csspw.cn)

经 销 新华书店

印 刷 北京奥隆印刷厂 装 订 广增装订厂

版 次 2007 年 11 月第 1 版 印 次 2007 年 11 月第 1 次印刷

开 本 880 × 1230 1/32

印 张 9.5 插 页 2

字 数 220 千字

定 价 26.00 元

凡购买中国社会科学出版社图书, 如有质量问题请与本社发行部联系调换
版权所有 侵权必究

中文摘要

近代以前的东亚，是以中国的朝贡体制为中心的“华夷体制”。日本在1639年实行锁国政策以后，采取了一种有别于中国“华夷体制”的独自的外交体制。而明治维新以后，日本很快适应了西方的近代国际体系，并把欧洲列强式的扩张政策移植在亚洲各国身上。那么，日本建立这一系列外交体制、外交政策的思想基础是什么？

我们知道，思想观念在一个国家对外关系中的作用，主要体现在其涉外制度、对外政策以及对外认识等。这是因为，一个国家对外政策总是与这个国家的对外认识、即这个国家整体的对外思想观念有着千丝万缕的联系。因此，研究日本历史上的对外思想、对外认识，是探索日本对外政策的必经之路。

本书以日本人的对外认识为视角，以时间为轴线，考察近代以前日本人的对外认识。具体考察他们如何认识亚洲、又是如何认识欧洲的。特别是将近代中国、韩国与近代日本相关联时，许多问题值得我们认真思索。

本书分三个部分。

第一部分研究的是新井白石。新井白石（1657—1725）是日本江户时代中期的儒学学者兼政治家。他的对外认识，尤其是他的亚洲认识与欧洲认识，对后世日本的对外认识产生了巨大的影响。近代以前的东亚国际关系，是以中国为中心的册封、朝贡关系为基础的国际关系。但近代以来，日本却极力回避进

入中国的华夷秩序，实行“锁国”政策，并形成了以日本为中心的小型华夷秩序，即所谓的“日本型华夷秩序”。在这种体制下，日本把朝鲜作为“通信之国”，把荷兰以及中国作为“通商之国”。同时，日本通过荷兰获取欧洲的信息，通过中国商人获得中国信息。新井白石生存的时代，正是日本的这种外交关系相对稳定的时代。但是，新井白石却通过与西方传教士的接触，获得了最新的欧洲认识，最先认识到欧洲国家的“危险性”。同时，他又认识到“西学”即西方科学的先进性，而在日本首开了西学之路。另外，当时日本与“通信之国”朝鲜之间最大的外交盛事便是“朝鲜通信使”的访日。在外交礼仪上两国以平等为原则，但新井白石却通过一系列改革，努力营造日朝关系中的日本的主导地位。导致新井白石对朝外交强硬态度的，是他的朝鲜认识。而决定其朝鲜认识的思想基础，是他对历史的认识。

可以说，无论是新井白石的欧洲认识还是他的朝鲜认识，都对后世日本产生了巨大的影响，成为日本对外认识的基本出发点。基于此，研究考察新井白石的对外认识具有重要的意义。

第二部分研究的是17—18世纪日本的对外政策以及对外认识。将具体考察日本的对外政策以及对外交涉过程，并考察代表那个时代新知识阶层的“兰学家”、“洋学家”的对外认识。

与17—18世纪前半期相对稳定的国际关系不同，18世纪末到19世纪初，日本所处的国际环境发生了巨大的改变。首先是俄国登上了世界的舞台，频繁地向日本提出通商要求。之后，英国步俄国后尘，也频频靠近日本，这使得日本的外交体制面临重大的挑战。同时俄国在日本北部诸岛的活动也使日本人意识到“北方问题”的重要性，在此背景下日本制定了北方政策，以及应对英国的海防政策。这些都是日本在新的国际环境

下所采取的新的对外政策。但值得注意的是：日本在此阶段外交政策中，反复强调的“锁国之法为祖宗之法”的论调，是其消极应对西方国家的外交策略。

另外，在朝鲜问题上，日本国内“朝鲜蔑视论”、“朝鲜属国论”日益抬头，使得朝鲜通信使的日本之行充满曲折和屈辱，最终持续近200年的朝鲜通信使于1811年走到了终点。

在此种国际形势以及国际关系的变化中，最早做出反应的是“兰学家”与“洋学家”们。他们树立了怎样的新的世界观？在俄国问题、英国问题上他们有着怎样的反应？他们有着怎样的对外认识？本书通过考察“兰学鼻祖”——杉山玄白以及洋学家、同时身兼藩政要职的渡边华山的对外认识，揭示了洋学家在西方认识过程中的双重性。

第三部分考察了明治维新之前，日本“尊王攘夷”的代表人物吉田松阴。鸦片战争中中国的失利，使当时的日本产生了巨大的危机感。吉田松阴的对外认识与其强烈的危机感是分不开的。他学习西方军事技术的热情、“偷渡美国”的尝试，都与他的危机意识有着密切的关系。因此，他的本国认识——日本认识也与他的危机意识密切相关，但是，当他把日本的存亡作为第一位时，他便很难从他主观的历史认识中摆脱出来。因此，在他一面唱响欧洲、美国是日本的天敌的同时，他又提出了入侵亚洲各国的主张，其根源在于他的历史认识。

在前近代，亚洲和欧洲是两个完全不同的世界。欧洲世界是不为亚洲所知的另一个世界。而在亚洲世界中，日本赖以存在的基础是什么？有人说是所谓的“武力”，但通过追寻“武力”的根源，作者发现最基本的还是在于日本人的“历史认识”。

综观本书所考察的新井白石、杉山玄白、渡边华山、吉田

松阴等，在对外认识方面，他们有着比较大的差异性。但是，他们的历史认识、即他们对日本历史的认识却是一致的。他们都把日本神话中对外扩张的历史、传说中日本武力的强大等作为真实的日本的历史。在这种历史认识下去构筑对外关系，不可能不造成扭曲的国际关系。

在现当代的亚洲关系中，日本与中国、韩国一直都未能有真正意义上的相互理解，根本原因在于历史认识问题。而日本人的历史认识问题一直是困扰中日韩三国关系的核心问题。因此可以说，对外认识问题，不单单是如何认识他者的问题，更是如何认识历史、如何认识自我的问题。

现代国际关系不是单纯的历史问题，各国间在各个方面有着千丝万缕的关系。但是，要构筑平等、友好的国际关系，最根本的是各国都拥有正确的历史认识以及正确的本国认识。

目 録

はじめに	(1)
一 研究の視座	(1)
二 研究の対象と方法	(4)
三 本書の構成	(6)

第一部 新井白石研究

第一章 新井白石の対外認識	(13)
はじめに	(13)
第一節 新井白石の西洋認識	(16)
一 白石とシドッチ	(16)
二 白石のキリスト教批判と中国	(23)
三 白石と西洋の学問	(30)
四 白石のオランダ認識	(32)
第二節 新井白石における朝鮮認識	
——朝鮮通信使との交渉を通して	(38)
一 「日本国大君」から「日本国王」に	(38)
二 白石の復号論について	(45)
三 白石における日朝交渉	(48)
四 白石の朝鮮認識	(52)
第二章 新井白石の世界像と日本を中心とする	

挑戦	(59)
はじめに	(59)
第一節 白石の世界像	(60)
第二節 日本を中心とする試み	
——中国に向けて	(66)
一 日本を中心性、優位論の創出	(66)
二 「信牌」問題について	(72)
三 虚構の結末	(75)
おわりに	(81)

第二部 近世中後期の対外認識

第三章 近世中後期における日本の国家政策と

対外交渉	(87)
はじめに	(87)
第一節 中後期における日本の国家政策	(90)
一 長崎貿易対策	(90)
二 蘭学への道	(94)
第二節 ロシアの南下と日本の対外交渉	(97)
一 ロシアの南下と日本	(97)
二 蝦夷地政策と日露交渉	(106)
三 幕府の海防策と「鎖国」祖法の創出	(115)
おわりに	(120)
第四章 杉田玄白の対外認識	(122)
はじめに	(122)
第一節 杉田玄白の世界観	(124)
一 『解体新書』の翻訳	(124)

二 玄白の世界観……………	(126)
第二節 杉田玄白の社会認識……………	(130)
第三節 杉田玄白の対外認識……………	(134)
一 玄白のロシア認識……………	(134)
二 朝鮮通信使殺害事件をめぐる……………	(140)
おわりに……………	(143)
第五章 渡辺崋山における西洋認識と海防……………	(147)
はじめに……………	(147)
第一節 イギリスの登場と日本の対外政策……………	(149)
第二節 渡辺崋山の西洋認識……………	(154)
一 渡辺崋山と洋書……………	(154)
二 渡辺崋山の西洋認識 ——ロシア・イギリスを中心に……………	(161)
第三節 渡辺崋山と海防……………	(166)
一 田原藩から出発する海防……………	(166)
二 変わらぬ志……………	(174)
三 崋山の海防の目的……………	(180)
おわりに……………	(184)

第三部 吉田松陰研究

第六章 吉田松陰における対外認識と自国認識……………	(187)
はじめに……………	(187)
第一節 不断超克の自己形成 ——遊学を中心に……………	(188)
一 対外意識の自覚と九州遊学……………	(188)
二 東北への旅——実践への展開……………	(192)

三 救国策を探る道——江戸遊学	(195)
第二節 吉田松陰における対外意識	(199)
一 アヘン戦争と松陰	(199)
二 松陰のアジア観	(206)
三 松陰のヨーロッパへの対応	(215)
第三節 吉田松陰の自国意識	(222)
一 日本の発見	(222)
二 松陰における尊王	(227)
第四節 吉田松陰と象山	(236)
一 「夷を以て夷を制す」	(236)
二 歩み異なった二人	(241)
三 二人の悲劇的な結末	(247)
第五節 近代中国における松陰像	(250)
一 黄遵憲の松陰認識	(252)
二 康有為の松陰論	(255)
三 梁啓超の松陰像	(259)
四 松陰と孫文	(263)
おわりに	(266)
終章	(270)
はじめに	(270)
一 「共有」世界の形成	
——対外認識と海外情報	(272)
二 対外認識と自国像	(277)
おわりに	(282)
参考文献	(286)
後書き	(292)

はじめに

一 研究の視座

本研究は、近世の日本知識人が持っていた対外認識のあり方や、対外認識の変化を明らかにしようとするものである。

近世は、幕藩体制社会の成立・発展期、安定期、および動揺・解体期の三つに分けることができる^①。徳川家康が1603（慶長8）年江戸に幕府を開き、第二代將軍徳川秀忠、三代將軍徳川家光の時代を経て、幕藩体制は成立した。また、徳川家綱時代を経て、五代將軍徳川綱吉の時代に、日本は元禄時代の繁栄を迎えた。幕府を開いてからの100年間は幕藩体制の成立・発展期に当たる。1709（宝永6）年六代將軍家宣の治世に始まり、1793（寛政5）年の松平定信失脚までの約90年間は、平和が続いた江戸時代の中でも、もっとも安定していた時代であった。しかし、寛政以後から幕末まで、日本の対外関係の緊張化に伴い、幕藩体制は動揺し解体していった時期であった。1868（明治1）～1871（明治4）年の明治維新・廃藩置県によって、日本の歴史は近世から近代に移った。

① 大石慎三郎「徳川吉宗と江戸の改革」講談社、1995、15頁。

日本近世の対外関係は「鎖国」^① という一言で表現されることが多い。しかし、近世史研究の中で、1970年代、「鎖国」の語は、西洋に対する閉鎖だけを問題とし、日本と近隣諸国の朝鮮・琉球・中国との関係を正しく捉えていないどころか、無視している点に問題があると指摘された^②。また近年では、近世日本が「鎖国」であったか否か根本的な疑問が提起され、「鎖国」論を改める研究も出てきた^③。荒野泰典は、「鎖国」という言葉は日本と東アジアの関係を無視しているから、近世日本の対外関係の在り方を表現するものとして否定した。そのうえで、日本の対外関係の在り方を「海禁」、「華夷秩序」という当該期東アジア諸国に共通する特質として把握すべきだと主張した。荒野の論は注目され、さまざまな議論を呼び起こした^④。またこうした視角から、日本と周辺諸国・諸民族との接点である「四つの口」^⑤ を論じるものが現

① 「鎖国」という言葉は、志筑忠雄がE・ケンペル著の『日本誌』の付章を翻訳して『鎖国論』と名付けたことにより、世に知られたと言われている。

② 朝尾直弘「鎖国制の成立」（『講座日本史4 幕藩制社会』東京大学出版会、1970）、山口啓二「日本の鎖国」（『岩波講座世界歴史 十六』1970）、佐々木潤之介「序説・幕藩制国家論」（『大系日本国家史3 近世』東京大学出版会、1975）などがある。

③ 荒野泰典『近世日本と東アジア』（東京大学出版社、1988）、田中健夫『対外関係と対外交流』（思文閣出版、1982）。

④ 加藤栄一「鎖国論の現段階」（『歴史評論』475、1989）、新栄平房昭「近世日本の『海禁』・『華夷秩序』論と東アジア」（『歴史科学』117、1989）、山本博文「鎖国と海禁の時代」（校倉書房、1995）など。

⑤ 具体的に、琉球に対する薩摩口、オランダ・中国に対する長崎口、朝鮮に対する対馬口、蝦夷地に対する松前口、近世日本の対外関係の四つの窓口のことを指すものである。

れた^①。

上述した「海禁」や「華夷秩序」及び「四つの口」などの論は、何れもその時代の対外関係のあり方を幕府の権力編成、幕府の統制体制の観点に集中している。しかし、近世に生きた人々が、このような社会状況の中で、どのような対外認識をもっていたのか、彼らがその時代の対外関係のあり方に対して、どのような姿勢であったのかなどを究明しようとする研究はまだ少ない^②。

本研究は、対外認識という視角から、近世の日本知識人がどのような対外認識を持っていたのかについて検討する。時間を軸にし、その時代に生きた人々が認識していた「世界」を見ることを通して、近世史上における日本知識人の在り方、彼らはどのように自分を見、どのように「外」を見ていたかを究明したい。

具体的には、近世における日本人がアジア、ヨーロッパをどう見ていたかの考察を中心に進めたい。特に朝鮮・中国の近代と日本の近代を関連してみる場合、現代人であるわれわれは改めて思索しなければならない点がたくさんある。

① 鶴田啓「近世日本の四つの『口』」「アジアのなかの日本史Ⅱ 外交と戦争」東京大学出版会、1992。

② 私が取り扱う研究対象に関しては、個別的な研究が存在しているが、(個別な先行研究について、各章を参照されたい) 近世という時代を通して、一つの時代認識の流れ、方向性を貫くものが彼らの中に存在していることに注目するものはまだ見られない。近世と対照的に、近代の対外関係研究の中で、この面の研究がたくさん見られる。竹内好編『現代日本思想大系アジア主義』(筑摩書房、1963)、古屋哲夫『近代日本のアジア認識』(緑陰書房、1996)、岡本孝治『近代日本のアジア観』(ミネルヴァ書房、1998)、安川寿之輔『福沢諭吉のアジア認識』(高文研、2000)などがある。

特に中国人である筆者は、日本人の対外認識を見る場合、中国の歴史上における外国との接触・交渉する過程に現れた中国の対外認識を考察する必要もあると感じた。

二 研究の対象と方法

本研究で扱う時代は、18世紀初期から幕末までである。すなわち幕藩体制の成立期を経て安定期に入った江戸中期、動揺・解体に向かう江戸中後期及び激動の幕末期にあたる時代である^①。当時の日本を取り巻く世界の動向は、つぎのようなものであった^②。

アジアの諸国間では、基本的な力関係に変化はなく、国家権力の交代も見られなかったものの、ヨーロッパでは、イギリスが一六四九年にピューリタン革命に成功し、いよいよ産業革命に邁進する時期であった。当時のイギリスはまだ極東地域に発展するほどの力がない。他方、アメリカが独立したのは、1776年であり、そのころ海外への動きはまだ見られない。18世紀前半までは、日本を取り巻く国際環境は比較的安定していた。しかし、約半世紀後の一九世紀に、ロシアの南下をはじめ、ヨーロッパ諸国の対立、抗争が世界規模へ拡大することとなった。イギリスは日本の近海に接近し、日本に対して通商を要求する。幕末になると、アメリカが日本に対する開国を要求するなど、日本を取り巻く国際環境はますます

① それは、江戸初期には、日本の対外関係の枠組みは変動性があり、家康の積極的な全面外交から、家光時代の「禁令」発生によって、近世の中後期と違う特徴を持っているからである。近世初期の日本の対外関係については、永積洋子『近世初期の外交』（創文社、1990）などを参照されたい。

② 大石慎三郎「徳川吉宗と江戸の改革」講談社、1995、19頁参考。

す緊迫していた。

このように、国際環境も国内政治も安定していた江戸中期の日本人の対外認識や、世界情勢の変動する中後期の日本人の対外認識はどのようなあり方であったのか。その対外認識のあり方はどのように変化していくのかなどを考察することが本研究の目的である。研究対象は、日本の知識人に限定することにしたい。それは、近世の「鎖国」により、外国の情報は基本的に幕府に独占され、普通の庶民は外国情報に自由に触れることはできなかったのも、彼らの対外認識を考察するには限界があるからである^①。本研究で取り上げる人物は、それぞれ自分の立場で外国の情報を有し、また、それぞれの時期を代表する知識人である。研究対象として、江戸時代中期、後期の儒学者、蘭学者、洋学者、兵学者（武士）等を取り上げ、彼らの対外認識の在り方を検討することにする。個々の人物が遺した史料を考察して、彼らは生きていた時代の諸条件のもとで、いかなる対外認識を持つに至ったのか。彼らがヨーロッパ、アジアに対して関心を持った経緯などを明らかにし、史料に基づき彼らの対外認識を分析するという方法を取る。

彼らの対外認識はそれぞれ固有の特徴を持ちながら、共通した要素も見られる。そのような共通する要素を抽出するこ

① 普通の庶民の全体の対外認識を考察するには無理があるものの、朝鮮通信使の来日により、日本庶民は朝鮮に対しては、一定の認識を形成した。それについては、池内敏「『唐人殺し』の世界——近世民衆の朝鮮認識」、(臨川書店、1999)、倉地克直「近世日本人は朝鮮をどうみていたのか」(角川書店、2001)などを参照されたい。指摘したいのは、庶民の朝鮮認識はあくまで知識人のそれを継承し、彼らの理解しやすい「劇」の世界で理解したに過ぎなかった。

とにより、彼らが共有していた国家認識、歴史認識、文化に対する認識などを解明することができる。

三 本書の構成

本研究は上述した研究視座に基づいて、第一部、第二部、第三部の三部で構成する。

まず第一部では、江戸中期の儒学者であり、同時に幕政に大いにかかわった新井白石を取り上げ、彼の西洋認識およびアジア認識を考察することにする。新井白石の対外認識は、彼が生きた時代の時代風潮を継承しながら、その時代においては斬新な認識を持つことができた。もともと、前近代の東アジアの国際関係は、中国を中心とした冊封・朝貢関係を基軸とする国際秩序のもとに展開されていた。しかし、近世日本は中国を中心とした華夷秩序に編入されることを回避すべく、日本を中心とする小型の華夷秩序を作りだした、いわゆる「日本型華夷秩序」である^①。日本型の華夷意識にもとづく国際関係は、徳川家光の寛永期に形成されたもので、その表れである対外関係の枠組みは、新井白石が活躍した時代に至っても維持することができた。当時日本の対外関係の枠組みというのは、即ち朝鮮と通信関係を持ち、中国・オランダと通商関係を持つというものであった。将軍の代替りの際に朝鮮通信使の来日することが通例になっていた。他方、オランダ商館から定期的にヨーロッパに関する情報を『阿蘭陀風

① 日本型華夷意識に関しては多く言及がなされており、主なのは、朝尾直弘「鎖国制の成立」（『講座日本史4 幕藩制社会』、東京大学出版会、1970）、荒野泰典「近世日本と東アジア」（東京大学出版社、1988）、ロナルド・トビ「近世日本の国家形成と外交」（創文社、2001）などである。